

囚われた正義のヒーロー

「く……グリーンはまだ情報を吐かんのか!」

都内、とあるビル地下。ビルを支える鉄骨が柱のように並び立ち、開けた空間がある。そこには現代には似つかわしくない仰々しいマントを着た角を持つ骸骨の男が、赤カーペットの先にある玉座に腰かけていた。

彼に近寄った灰のフードを被った側近が恭しく頭を垂れながら言う。

「申し上げますドルガン様。吐かないどころか、何も口にせず、四肢を縛り付け点滴を流さなければ餓死の可能性すらあります」

「そのためにお前たちに指示しているのではないか！ 何人も寄つてたかつてグリーン一人吐かす事が出来ないとすれば……」

ドルガン —— それは欲望による人間の支配を目的とした怪人異能集団だ。

セインの一族と呼ばれる正義の味方、この世界の秩序を重んじる者達による野望を阻止されている、闇の一群。そんな、特撮とも呼べるような世界 ——

「……まだ二十歳にもならん小僧の癖に、さすがはセインの一族だけはあるか……このまま抑えつけておけば、他の小僧にこの場所を感知される恐れもある」

セインの戦士は互いを呼び合う力があるとされている。散々煮え湯を飲まされてきたドルガンにしてみれば、なんとしてでもこの千載一遇の機会にセインの戦士達のアジトを突き止め、決着をつける必要がある。

だが、捉えたグリーン精神力はドルガンの想像をはるかに上回っていた。セインの基地に繋がる情報はもとより、今だ本人の素性すら聞きだす事が出来ていない始末だった。

「ドルガン様、私をお使いくださいます」

その時、柱の陰から、声が響いた。

「お前か——！ だが、お前は一度破れておる」

「その通りですわ。戦闘能力では破れた事を認めなくてはなりません。ですが今、グリーンは一人……彼が拷問に吐かない以上、私の搦め手が有効ではないかと」

ドルガンはその声に暫し黙考したが、やがて骨を歪めて笑い声を響かせた。

「よし。グリーンはお前に一任する……見事白状させ、セインの在り処を聞き出すのだ ——

肉欲の柱、ベルトナよ」

「はい。ありがとうございますわ……♪ ドルガン様」

ドルガンの許可に、声——女性——は頷き、笑みを浮かべた。

第一夜

「う……ここは……」

セインの戦士であるグリーンは、目覚める前と同じ格好で礫られていた事に気付いた。部屋の中央に、十字架がつりさげられ、そこに固定されていた。

顔以外は変身時のままであり、緑色の特殊スーツが全身を包んでいる。

真っ白な小部屋。匂いやおかしな所もない。強いて言えば、怪人たちの拷問による仕掛けが床や壁、天井から降りてくる事くらいだが——

今は点滴もない。どうやら気絶している最中に栄養を補給されたいらしい。

「くうっ……皆……ごめん」

一瞬の不覚をつかれ、一人の所を誘拐されてしまった。グリーンは人間としては十●才の少年である。高校生として暮らしながら、日夜仲間と共に闇の勢力戦いに明け暮れていたのだ。だが、彼は一瞬の不意を突かれ、今ここに捉えられていた。

(きつと皆が見つつけてくれる……それまで耐えるんだ！)

ありとあらゆる拷問に耐えて見せる。そして、実際彼は十●才の少年として驚異的なまでの忍耐力を持って敵の拷問に耐え、今まで戦ってきていた。

壁には彼らの戦いの時の相棒である、セインの力に反応して光の剣を生み出す事の出来る武器、セイン・ソードが懸かっている。あれを手に入れる事さえできれば、外部へと連絡を取る事が出来、怪人たちにも勝つ事が出来るかもしれない。

でももし耐えない時、それは……死を選ぶしかない。

正義の使者がそんな悲壮な決意を固めた時、目の前の壁に切れ目が生まれ、音もなくドアが開いた。

グリーンは咄嗟に身を固め、現れるであろう新たなる拷問手への覚悟を固め——

「久しぶりね♪ グリーンちゃん」

この場にそぐわない突然の明るい声に、グリーンは目を見開いた。

「！ お前は……ベルトナ？」

目の前に現れた怪人に驚愕した。

コツ、コツと足音を響かせながら現れたのは、ドルガンの一味の一人——ベルトナだった。

人間に直せば、三十辺りの年齢といった所か。十才のグリーンから見れば、「大人の女性」であり、「おばさん」ともいえる年齢。波打つ紫の髪は肩の辺りで揃えられ、細い首筋から鎖骨までが良く見えた。

不敵な青に輝く瞳と、髪と同じく紫にぬめり光る唇。やや垂れた形を持つ目。受ける印象は優しそうな人、と言った所だが、それをそのまま受け取ってはならない相手だ。

長い睫毛に通った鼻筋や整った唇が、白い肌に相まって美しい顔を作っていた。

「つ……お、お前は死んだはずだ！」

「ドルガン様に甦らせていただいたの……貴方の一撃の痺れは——まだ私のココに残ってるわよ」



そう言っつて、赤いグローブを嵌めた指をくびれた白いお腹にあるへそを撫でる。

身長はグリーンより頭一つ大きい——百七十五センチはあろうか——、長い手脚による均整の取れた肉體。

照明に光る桃色の袖のないボディコンで包み、尻からふとももにかけては同じく桃色のガーターベルトが肉付きの良さを見せつけている。手脚は赤のグローブとブーツで固め、まろみをおびた尻が盛り上がっていた。白い肌を見せる肩や腕とのコントラストが眩しい。

へそを出した細い腰と強烈に盛り上がる巨乳は、ボディコンスタイルの恩恵を受けてこ

れでもかと見せつけるようになっていた。
胸。

GカップかHカップはあろうかという大きな胸は身に着けた服の束縛によって前を向き、形の良さと大きさを見せてつけている。深い谷間にはハートマーク型のくり抜きがあり、ハートの部分だけが薄ピンク色になっていた。深い谷間と柔らかそうな乳肌が見えていた。

手に持った小型のウィップを胸の谷間に挟み、ベルトナは笑みを浮かべた。

「復活したっていうのに……その悪趣味な服は変わらないのか。ドルガンは貴重な魔力の使い道を間違えたみたいだね」

「あら失礼しちゃうわね……結構皆に人気あるのよ？」

そう言っ脚をクロスして腕を胸の下で組み、ウィングのち、ポーズ。肉づき艶めかしく伸びた手足を強調し、何より巨乳が寄せあげられて衣服がはちきれそうになる。

「ふん……モテないおばさんは辛いんだね」

「なっ……全く、おばさんだなんて……もう、素直じゃないのね」

年甲斐のないムキになったベルトナの言葉に、グリーンは嫌悪感を持っていた。だが言い返しながらも、微かに肉着いたふともも、伸びた手足、悪趣味だが色気のある唇に目が行きそうになる。ハート型にくり抜かれた谷間は張りつめつつも柔からそうに揺れていいいて、グリーンは無意識に唾を飲み込んでいた。

「あらあら。ちよっとグリーンちゃん、目が泳いでるわよ。どこを見てるのかしら♪」

それに気づいたのか、ベルトナは厭味つたらしい笑みを浮かべて近づいてくる。

「ふ、フン！ 勘違いさ！」

グリーンは固定されていない首を捻り、目を閉じた。

「一発でやられた怪人を復活させるなんて……」

グリーンは脳裏には、この怪人と戦った時の記憶が、ありありと蘇ってきていた。

その時は、街に連続の通り魔が出たという話から始まった。見境なく、まるで理性を無くしたように暴れる男——マスコミは騒ぎ立てたが、セインの戦士達にはそれが誰の所為なのか、すぐにわかった。

背後に居たのはドルガンの一味の一人、ベルトナ。彼女の目に魅入られた者は自らの肉欲を制御する事が出来ず、放埒の限りを尽くすようになってしまったのだ。グリーン達セインのメンバーはこそそと闇に隠れ、人を唆すドルガンの一味を探し続けた——

「あら、でもグリーンちゃんに正体がバレる前に会った時——グリーンちゃん、私のカラダ、

お尻にオツパイを見て興奮してたじゃない？」

「ち、違う！」

「違わないわよお。OLスーツ着た私を見てキョロキョロしてた癖に……」
愉しそうな笑みを浮かべるベルトナを見て、グリーンは唇を噛んだ。

(あ、あれは違う……騙されただけで……)

中々尻尾を出さないベルトナに対して、グリーン達は様々な場所を探し、見回ったが見つけれなかった。その中、偶然夜道で出会ったOLに扮したベルトナとグリーンは会っていたのだ。

『この辺りは夜危ないですから気を付けてくださいね』

まさか自分が悪の怪人に声を駆けて注意をしていたとは思わず——勿論可能性はあったのだが、感知できないと思っていなかった——街灯の下で振り返り、にっこりと笑みを浮かべた大人の女性に思わず見とれてしまったのだ。

『あらありがとう。若いのに偉いわね』

『あ、は、はい。ありがとうございます……』

その時のベルトナは紫髪を隠し、黒いショートの髪と控えめな口紅で顔を彩っていた。その美貌に一瞬面食らったが、視線が下に落ちると、さらにグリーンは目のやりどころに困ってしまった。

タイトなスーツから、胸の所はシャツが盛り上がって苦しそうに自己主張していた。くびれとハイヒールの靴によって締まったヒップや長く白い脚が、ごく普通の少年の一面を持つグリーンにはかなりの強い刺激だった。

『ねえ、ボク？』

『えっ、あ、はい！』

しまった。なんて失礼な事を。グリーンは声をかけられて赤面した。思わず、シャツの苦しそうなふくらみや、お尻のまるみに目が釘付けになってしまっていた。それがバレたのだろうか、後ろめたい気持ちと共に、グリーンは女性の顔を見た。

『ここは少し暗くて怖い所だったから、安心しちゃったわ』

だが、女性は柔らかな笑みを浮かべてそうお礼を言ったのだ。

『なら、明るい所まで一緒に行きましょうか？』

思わずそう提案し、笑顔で頷いた彼女と共に、グリーンは少しの夜道を歩いた。

(……いけない、任務の最中なのに。でも、今日は良い日かも……)

そんな事すら思っていたグリーンは、大通りまで出た時、女性に声をかけられすぐに振り

返った。

『ありがとう、助かっちゃったわ』

『いえ。その、一人は危ないですから……』

『ふふ。お礼をしないとイケないわね』

『お、お礼？ そんな、そこまでは……あっ？』

そう思ったグリーンだったが、女性の顔が近づいてきている事に気付いて赤面した。だが、美しい顔と、甘やかな香りが漂う年上の女性の色香に惑わされ、彼はじっと彼女と見つめ合っ
てしまっていた。

『ふふ……私の目をよく見て……』

『え……あ……』

黒の深い瞳が、気の所為か青く光っている。だが、目を背ける事が出来ずにそのまま見つめあつてしまう。

(あ、あれ……?)

『昏くまばゆい輝きに照らされなさい……この輝きを知れば、貴方は全てを解き放つ事が出来る……肉欲の柱、ベルトナの名の元に。貴方を縛る鎖を溶かす……』

ぐにやり、と視界が歪み、グリーンの内脳に麻薬が溢れたかのような快楽が渦巻き始めた。
(これは、まさか……)

ゆっくりと女性は細い手を伸ばし、グリーンを掴んで顔をさらに寄せてくる。溶け落ちそうな表情になってしまった少年は、近づいてくる艶やかな唇を前に、礫にされたように身体を固まらせていた。

女性は、妖艶な笑みを浮かべて囁いた。

『〈肉欲の瞳〉の眩きに――』

『うああああっ!』

『なっ!?!』

グリーンはすんでの所で、目の前の美女がただの美女ではなく、セインが探し回っていたドルガンの一味だと悟った。

『お、お前がベルトナか?!』

『あらっ、もう……後少してセインの戦士を貰えると思ったのに……!』

ベルトナは優しそうな顔をかなぐり捨て、舌打ちして跳び下がる。そしてOLの衣装のみを残して闇夜に飛び去って行った……

「……あの時、私を見つづけていればすぐに気持ちいい思いが出来たのに……」

今までの怪人とは違う欲への誘惑に、一度は折れかけたグリーンだった。だが、彼はセインの戦士として誘惑を断ち切ったのだ。

次に出会った時のベルトナに、僕は仲間とともにセイン・ソードの一撃を刻み込み、勝利したんだから――

「でも、お前は負けたんだ。みじめにね」

「っ……ええ。戦いではグリーンちゃん達に勝てなかったわ。認めるわよ、もう……グリーンちゃんの一撃は、ことさら力がこもってたわね」

回想するように、ベルトナは悔しそうな表情を浮かべる。だが、すぐに表情を笑みへと変えた。あの夜浮かべたような優しい気な美しい笑み。ただし、紫唇と紫髪が彼女の「肉体」を強烈に煽り立て、印象は全く違っていた。

「でも今は、グリーンちゃんは囚われの身……うふふ、たっぷりお礼をしてあげなくちゃいけないわ。愉しみね♪」

ウィップでびしゃりと床を打ち、笑いかけてくる。

「くっ……」

(こゝ、こんな弱い怪人に負けるわけにはいかない！)

グリーンは思わず身震いした。恨みを込めたベルトナの拷問は、きつと他の怪人より激しい物になる。

「やるなら好きだけやればいい。でも僕は絶対にお前には屈しない！」

覚悟を決めたグリーンの声が小部屋に響き渡る。

ベルトナはその声を聞くと、静かに笑った。

「全く。若いのにひねくれちゃって可愛そうね……でもその可愛い減らず口……これから聞けなくなるなんて寂しいわ」

「な……」

そして、予想外の動きに來た。

ズクリ、と、グリーンの身体が震えた。おもむろにベルトナはグリーンの顎を細い指で撫でると、キス出来そうな程顔を近づけてきたのだ。妖しい光が、磔にされた正義の使者を射抜く。

(また、〈肉欲の瞳〉か？ 僕が耐えられないとでも……)

「使わないわ。〈肉欲の瞳〉は。詰まらないじゃない？」

「何っ……」

「私が今から貴方を受け持つ事になったわ。早く喋った方が身のためよ。グリーンちゃん♪」
「……お前等の持つ拷問は僕には効かないって言ってるだろ！ 口が割れない事はわかっ

てるはずだ！ 僕は負けない！」

グリーン言葉に、ベルトナはクスリと笑った。

「本当に素敵だわ……でもね」

顎に当てた細長い人差し指をゆっくりと下におろしていく。鍛えた胸板や腹をくすぐるように撫でられ、グリーンは困惑した。

(何をやる気だ……?)

耳元で、湿った魔女の声が響く。

「これはどうかしら？」

「っ！ ああっ?!」

そして、予想外の所に彼女の指が行きつき、グリーンは睨みつけていた目を見開いて汗を浮かべる。

「どうしたのグリーンちゃん。凜々しい顔が台無しよ？」

「ど、どこを触って……!」

「どこって……わかるでしょ？ グリーンちゃんのおチンポ」

その赤い指先が、グリーンの股間をくすぐっていた。彼のスーツの下にあるペニスの輪郭をなぞるようにゆっくりと、撫でるように這い回っている。

「あら……もう大きくなってきたわ。撫でてあげてるだけなのに……可愛い」

「やっ、やめろ……!」

グリーンは思っていなかった感触に、腰を震わせてしまう。むず痒いような快感が、彼の股間を這いまわっていた。

ベルトナは紫唇に赤い舌を這わせながら笑う。

「だ・め・よ。グリーンちゃんがいけないんじゃない……悪趣味なおばさんに撫でられただけでこんなにボツキするなんて……うふふふ、あははは!」

「くっ……くっ……くっ……!」

(バカに……バカにするなあ……!)

彼の意志とは裏腹に、ペニスは怪人の指の蠢きに反応して、緑色のスーツを盛り上がらせてくる。裏筋をツツ、と撫でられ、擦るように亀頭の部分を円を描くようにくすぐられる。

「グリーンちゃん。もしかして……童貞かしら？」

「っ!?!」

思わず目を見開いてしまったグリーンを見て、女怪人の笑い声が響き渡る。

「ふふ、可愛いわグリーンちゃん！ そうよね、セインの戦士と言ったら欲を封じ込める正義の使者……自分が肉欲に溺れていたら失格だものね？ 可愛そう、将来ずっと童貞なん

て……」

セインの戦士は欲に人間を溺れさせようとするドルガンと対峙する戦士だ。だから当然、欲に溺れてはならない。過剰な「肉欲」や「怠惰」、「傲慢」「暴食」、そして勿論「肉欲」も。

セインの戦士は「一族」というものの、能力の発現は遺伝ではない。だからその能力が発現してからの事となる。グリーンは、早くから適性があったため、一度も「女性」を知らないまま過ごして来た。彼は交際もせず、ずっと正義に身を殉じて来たのだ。

(そ、それを侮辱するなんて……!)

グリーンは今までの自分の全てを嘲られたと思い、唇を噛む。

「ここから出たら……必ずもう一度、お前を斃す……!」

声に出来る限りの怨嗟を込めて、グリーンは言った。

「もう。ひどい言い草ね……でも愉しみにしてるわ……♪」

ベルトナはそれを受け流す。悔し気に唇を噛むが、彼のペニス特殊スーツの下で早くも固くいきり立ち、そのお腹に張り付くように勃起した姿を浮かび上がらせていた。

「まだ人差し指しか使っていないのに……ほら、ドルガンの拷問は効かないんですよ?」

「くっ……このお……」

肉欲の魔女は笑いながら、正義の使者のペニスの裏筋を撫で上げる。逃れようとしても、腰の部分で固定されていて、身動き一つ取れない。屈辱的なまでに盛り上がってくる自分の股間を見せつけられて、唇を噛んだ。

(くそっ……僕が、こんな……耐えろ、僕はセインの……)

当然、正義の使者は禁欲の日々だ。その禁欲が邪を跳ねのけ、力を高めていく。だが、ベルトナの施す快樂拷問にとっては、裏目に出ってしまった。魔女の指のささやかなうごめきが、どうしようもなく、普段抑えている「欲」を煽り立ててくる。

「さすがセインの戦士、グリーンちゃんね……ボッキするとこんなにすぐくなるんて!」

「言うなあ……やめろ……ベルトナあ……!」

グリーンは羞恥にやられ、顔が真っ赤になったのがわかった。あのベルトナ相手なのに、不随の反応をしてしまうペニス憎らしい。ベルトナは完全に勃起させたペニスを優しく包み込むように手で包む。さわさわと袋を揉み包みながら、グリーンの耳元で囁いて来た。

「禁欲なんかさせられて……本当はたっぷりザーメンを出したかったんでしょ?」

「ち、違う! 僕達は……くあぁっ……!」

否定の首振りが快樂の痺れに変わった。

ベルトナの揉み込みが変化し、人差し指と親指で裏筋を根元から挟むように扱きあげてくる。そしてスーツ越しに乳首に接吻されると、赤い舌が這い回ってきた。

「ひいっ!？」

途端に、くすぐつたいような、ざらりとした温かい感触が乳首に広がり、甘いしびれが伝わってくる。ピチャピチャといやらしい音をわざと立てるように舐め上げてきた。

「ふふ、嘘は良くないわよ？ 早くこの悪趣味なおばさんに白状しちゃいなさい?」

ペニスの方も休ませてくれない。指で挟まれていたかと思うと、親指が亀頭を押しながら撫でまわして来る。てのひらが裏筋に押し当てられると、ズリズリと扱きながら袋をグニユグニユと揉み込まれた、

「な、なんでこんなにっ……くあああっ!」

予想できない指の動き、そして快感に、数々の拷問に耐えてきたグリーン顔に玉の汗が浮かぶ。

「当然よ……私はドルガン様の〈肉欲の柱〉……直接戦闘じゃグリーンちゃん達に負けちゃったけど……快樂なら負けないわ」

顔を赤くし、追いつめられるグリーンの顔を愉しそうに見つめながらベルトナは笑う。

「後は……グリーンちゃんがエッチだからじゃないかしら?」

「何っ……ば、バカにするな！ 僕はセインの戦士だ！ お前のような奴になんか……!」
グリーンはその言葉に怒った。ドルガンは欲望に皆を溺れさせてこの世の覇権を狙おうとする一群。セインとはそれを抑えつける戦士達だ。

(そ、そのセインの戦士である僕が……欲に溺れるなんて……)

腹に力を込め、ベルトナのブルーの瞳を睨みつける。

「だ、黙れえ……ドルガンの、てさっ……ああっ!？」

「可愛い声ね」

だが、左手で強く乳首を摘まれてしまい、その目に星が飛ぶ。甘くあたたかなざらつきだけだった乳首に突然、強い刺激が混ざり、呼吸が止まる。

ベルトナはそのままグリーンの乳首を紫唇と指で包むと、片方で優しく舐め上げたかと思うと指で強くつねり、指で優しく撫でたと思うと唇で甘噛をして、左右で非対称の快感を流し込んできた。

「あっ、くひいっ!？」

痛みと甘み、どちらに耐えれば良いのかわからずに、腰をビクつかせるグリーン、そして跳ねまわる股間で盛り上がるペニスにも、ベルトナの細い指が這い回ってくる。

(ど、どうすればっ……ああああ?!)

痛み、甘み、快感。三方を固められて、グリーンは荒く息を吐いた。

「……うふふ。グリーンちゃんのおチンポ、どこまで耐えられるかしら?」

(た、耐えろっ……相手はベルトナだ……斃した相手だ。それにドルガンの一味……こんな奴の快樂如きに翻弄されては……)

「べ、ベルトナ……っ、僕を舐めるな……」

グリーンは必死にそう言い聞かせて、目を閉じる。だが――

「くひいっ!」

「ふふ。やっぱり以外と可愛い声じゃない……グリーンちゃん?」

ベルトナの赤い指先が、それを許さなかった。

乳首をクリクリと摘みみながら、人差し指でペニスの亀頭を優しくひっかく。

堪えきれずに震えだしたグリーンの腰の動きを愉しむようにクニクニと袋を揉んだかと思うと、軽く平手打ちするように裏筋全体を叩き、スーツごと、円を描くように摩る。

「っああっ?!」

「ふふ……ちよつと出ちゃったかしら?」

淫らな指運びに、グリーンは目を開いて口から涎を飛ばした。性の魔女は磔にされているグリーンの隣で顔を伺ってくる。そのベルトナの笑みが、憎たらしくもいやらしかった。淫蕩な光がすぐ側で自分をつぶさに観察しているのがわかり、背筋が震えた。

「そ、そんなわけ……」

「でももう先走りでドロドロで目立たないわねえ。ふふ、セインのスーツがドロドロじゃなく」

「なっ……」

目を見開いて驚愕したグリーン。だが、ベルトナが指を鳴らすと壁が鏡に変わり、自らの盛り上がった股間と、言い逃れようのないシミが浮き上がっている。

(い、こんなに、もう、僕が……?)

若き正義の使者の動揺に、クスリと魔女は笑って、耳元で囁く。

「セインの一族の癖に、早漏でエッチなのね……知らなかったわ」

「べ、ベルトナお前え! それ以上の侮辱はゆるさっ、ああっ!」

顔を真っ赤にして声を荒げようとした時、ベルトナがペニスを扱く指がギュツと締め、スピードを上げてくる。

「侮辱は許さない……? グリーンちゃんが私の拷問に耐えて射精しなければ良いだけの

話よ……んっ」

「んんっ!! んひいっ!」

魔女はさらに一步近づき、匂い立つような妖艶さを持つ肉体を密着させてくる。

むにゆうう、と効果音すらつきそうな勢いでベルトナの巨乳が押し付けられた。

「グリーンちゃんが嫌ってたオッパイで、ギューギューしてあげるわ」

唇が奪われ、豊満な乳房が押し付けられる。グリーンは唇が、テラ光る紫唇に包まれた舌がグリーンの内への侵入を試みてくる。何とかそれを躲しながらも、今度はボディコンとセインのグリーンスーツ越しに、魔女と乳房とセインの戦士の胸板が密着させられる。

(な、なんでっ……こんなに……?)

いくらベルトナの乳房だ、と言い聞かせてもだめだった。あの夜見た、はち切れそうなシヤツの下が僕に押し付けられている。自らの胸板に巨乳が押し付けられ、ムニムニと淫らな形を歪めていく姿に、頭の芯の方が興奮してしまってきた。撫でられた所が熱くなり、必死の抵抗を示していた目がとろけそうになる。

「ちよつと……オッパイとキスでおチンポがさらにガチガチになっちゃったわよ？ どうしたの？ このオッパイは悪趣味なおばさんのなのよ？」

「……っ……!! うう……!!」

(嘘だ！ 僕が……べ、ベルトナに翻弄されているなんてえ……)

追い打ちをかけるように囁かれた言葉に、必死に目の光に敵意をこめ、グリーンはベルトナを睨みつけた。

だが、ベルトナの言う通り、肉欲の魔女の指使いに翻弄される。ペニスはさらに固く脈打ち、泣き始めている。

ベルトナはグリーンは唇との間に出来た糸を舐めとると、耳たぶに舌を這わせて来る。赤い舌が意志をもってグリーンはの耳を舐め、耳の穴まで入り込もうとしてくる。

「くっ……ひあっ……」

ジュルジュルという水音に脳を直接犯されるような快感に、グリーンは我知らず呆けたように口を半開きにしていた。乳首は弄られ続け、感覚が曖昧になってきていた。

「本当は戦ってた時も私のオッパイやお尻を見てたんじゃないかしら？ 仲間の手前、私を倒しちゃったのかしら？ ふふ、ねえ、教えなさいよお？ ねえ？」

(ち、違っっ……違っっ……)

「……はあっ……はあ……」

だが、心中ではなんとか反論が出来ていても、声が出なかった。

「ふふ、もう答える事も出来ないのね♪」

目を薄く開いたグリーンを、ベルトナは青い瞳で射抜く。赤い舌が紫の唇を這いまわり、捕食者の瞳、で緑のスーツの下で盛り上がった。ペニスを見つめた。

「じゃあセイン・グリーンはザーマンを、このベルトナにくれるかしら？」

「な……!! ふ、ふざけるな!!」

息を荒げながらも、グリーンは魔女を睨みつけた。

「強情ね、グリーンちゃん……まだまだそんな声が出るなんて……でも駄目よ」

「なにっ……んぶうっ!？」

一瞬、ベルトナの目の光が変わったと思ったが、再び唇を塞がれると、さらに手のペースが速まってきた。必死に身をよじらせるが、身体全てを固められてしまっている今のグリーンに、なすすべはない。

(耐えろっ、耐えろっ……ああ、でも……!)

ギリギリと精神に万力の力を込めるように言い聞かせるが、ベルトナの指はもはやグリーンへのペニスを籠絡したようにいやらしく這いまわり、快感を教え込んでくる。

カリ首を優しくひつかかれ、裏筋をズリ立てられる。胸を押し付けるのと同時に食るようなキスをささみ、優しく叩いてくる――

セインの戦士の黒い瞳は目の中を飛び回り、やがて天井の無機質な光に固定された。

(あっ……ああっ……だめだ……あ)

袋を採み込まれた時、微かに身体全体が震え、観念したかのように握りしめられていた両手から力が抜ける。

力の抜けた顔をベルトナに見つめられ、肩が震える。

「ふふ、グリーンちゃん……イツちやいなさい!」

「ふああっ……!」

ベルトナは正義の使者の顔を見て、美しい指でペニスを優しく扱ってきた。

(あああ、だめだあ! イグッ! イグウウウウウー!)

戦士の嬌声は、女幹部の唇でふさがれた。

「んんんんんんんんー!」

十字架全体を揺らすように腰が跳ね上がり、何度も精を噴出させていく。緑色の特殊スーツに染みがみるみるうちに広まり、精の匂いが広がっていく。グリーンの視界は狂ったように飛び回るが、妖艶な笑みを浮かべたベルトナの笑みが焼き付いたように映る。



「あらすごいわ。ビクビク跳ねまわってる……スーツに挟まれてとっても苦しそう……♪」
「ああっ、あ……ウヒイツ!?!」

不意に、射精を続ける裏筋が強く扱かれ、目を見開く。

ベルトナの手コキに合わせてグリーンへのニスは射精を続け、余すところなく欲望を、ベルトナの拷問に敗北した事実を突きつけてくる。

ベルトナは口づけをやめ、四本の指で優しく裏筋を撫でながら、射精を促していく。

「んん、エッチな匂いね……それにとっても魔力がこもってる……あらあら、目の焦点が定まってるじゃない……」

射精を続けるグリーンは、自分がベルトナという一度倒した怪人の拷問に屈したという事実、しかも快樂拷問であり、なすすべもなく敗れた屈辱感に満たされていた。

(ああっ……なんで、何でキモチいいんだあ……ぼ、僕は、セインの戦士で、正義のお……)
それなのに、キモチイイ。さらに、目もくらむような解放感と快感に挟み撃ちにされ、自分がおかしくなってしまうのではないかとすら思っていた。

「うふふ……いいのかしらグリーンちゃん？ 今貴方はドルガンの一味にしごかれてるのよ？ 私にイカされて嬉しいのかしら？」

「ち、ちがっ……くああ!」

「ならザーメンを止めて見せなさい?」

ベルトナの嘲笑を恨もうとしても、挟み打つかのようには蠢く指は感じた事もないような快感を流し込んでくる。ペニスの芯が甘くとけていってしまいそうな気がする程の射精に、目がくらんでいた。

(ああ………僕、僕はあ………)

彼はその屈辱と快感に挟み撃ちにされたまま、意識を失った。

*

「………気絶しちゃったのね………可愛い♪」

ベルトナはゆっくりと指をペニスから放し、磔にされたまま射精に導かれた屈辱に浸ったグリーンを見つめた。

「戦った時も思ったけど、まだまだ少年………力で戦えば勝てないけど、エッチな事なら負けないわよ」

大量の射精によって、グリーンのスーツの股間部分は染みが一目で分かるほどに広がっている。自らの手管に屈した正義の使者を満足気に見つめると、ベルトナはそっとグリーン
の髪を撫でた。

「………期待していなさいグリーンちゃん………たっぷり、肉欲に浸る事のすばらしさを教えてあげる………」

今までの拷問吏とは違う、甘さで溶かしてくる魔女。そんな怪人が目の前で静かに唇を歪めている事を、若き正義の使者は知らなかった。